大気主成分の凝結を考慮した 二次元湿潤対流の 基礎的数値実験

ennou

山下 達也(北大・理) 小高 正嗣(北大・理) 杉山 耕一朗(北大・理) 中島 健介(九大・理) 石渡 正樹(北大・理) 林 祥介(神戸大・理) 2009/05/12 (第17回惑星大気研究会オンラインセミナー)



火星の大気の特徴

■ 希薄な大気

- 平均地表面圧力:約7-8[hPa]
- 冷涼な気候
 - 有効温度: 220 [K]
- CO2 を主成分とする大気組成
 - CO2: 95.3 %, N2: 2.7 %, etc
- 大気主成分が凝結, CO2氷雲形成
 - 極域・赤道上空に分布

(Pettengill and Ford, 2000; Schofield et al., 1997)

- 過去の火星の温暖気候問題を解明し
 - うるキーファクター

◆ 散乱温室効果(右図)



Copyright : NASA



光田(2007)を改変



地球と火星の湿潤対流(凝結対流)

対流とは

• 流体の運動で熱が輸送される現象

■ 凝結対流の描像

	地球	火星
凝結成分	微量成分(H2O)	主成分(CO2)
雲周囲の環境	dry	wet
対流構造	雲内部に強い上昇流	???

 気塊の浮力は周囲の熱力学的環 境に強く依存

 主成分凝結対流はどのような構 造を持つのか?



雲





先行研究(1)

主成分凝結対流の先行研究

- Colaprete et al. (2003)
 - ◆ 鉛直流を考慮した1次元放射雲解像モデル
 - ◆ 結果: 地球同様, 雲内部に強い上昇流が発生
 - ◆問題点:
 - (1) 1 次元なので, 陽に対流を解くことができない (2) 主成分凝結の効果を考慮していない





先行研究(2)

主成分凝結対流の先行研究

- •小高他(2006)
 - ◆ 主成分凝結を考慮した 2 次元雲対流モデル(deepconv/arare)
 - ◆ 結果: 雲内部での上昇流は抑制される傾向
 - ◆問題点:
 - (1) 行なったのは単独の対流を発生させる実験のみ
 - (2) 凝結の計算過程に不備(詳細は後ほど)



本研究の目的・手法

• 目的

- 主成分凝結対流発生時の流れの平均状態を理解
 - ◆ 火星気象学への貢献
 - ◆初期火星の温暖気候問題への流体力学的アプローチ

■ 手法

- 小高他(2006)の雲対流モデルの凝結過程を改良
- 主成分凝結対流を次々と発生させる基礎的数値実験を実施



支配方程式

■ 2 次元準圧縮方程式(Klemp and Wilhelmson, 1978)に主成 分凝結の効果を考慮(Odaka et al.,2005)

 Q_{dis} : 散逸加熱項, Q_{rad} : 放射加熱項, ho_s : 雲密度

乱流パラメタリゼーション

- 1.5 次のクロージャモデル(Klemp and Wilhelmson, 1978)
 - 大気運動を考えるには乱流運動(小規模運動)を考慮しなければならない
 - サブグリッドスケールの乱流運動に関する物理量を格子点で表現されている物理量に結び付けて表現

$$\frac{\partial K_m}{\partial t} = -\mathbf{u} \bullet \nabla K_m - \frac{3gC_m^2 l^2}{2\overline{\theta}} \frac{\partial \theta'}{\partial z} + C_m^2 l^2 |\nabla \mathbf{u}|^2 + \frac{C_m^2 l^2}{2} \left(\frac{\partial u}{\partial z} + \frac{\partial w}{\partial x}\right)^2 - \frac{K_m}{3} \nabla \bullet \mathbf{u} + \frac{1}{2} \nabla^2 K_m^2 + |\nabla K_m|^2 - \frac{1}{2l^2} K_m^2$$

 $C_{\varepsilon} = C_{m} = 0.2$: 無次元パラメータ(Deardorff,1975) K_{m} : 運動量に対する乱流拡散係数 $l = (\Delta x \Delta z)^{1/2}$: 混合距離 $\Delta x, \Delta z$: 格子点間隔



雲物理過程(1)

■ 凝結過程

- 雲粒は拡散成長で成長(併合成長は無視)
- 凝結核数濃度は一定(5.0 x 10⁸ kg⁻³)
 (Tobie et al., 2003)
- 雲粒の重力落下は考慮 or 考慮しない
- 臨界飽和比 Scr は 1.0 or 1.35 (Glandorf et al., 2002)
- 凝結項の定式化(Tobie et al.(2003) に基づく)

M _{cond} =	$=\frac{4\pi n}{(L^2/h)}$	$\left(\frac{C_d N}{RT}\right) \left(S - 1\right)$	$H(\rho_s)$		
$S = -\frac{1}{p}$	$\frac{p}{p_*(T)}$	$p_* = \exp$	$\left[A - \frac{B}{T}\right]$	$r_d = \left(r_a \right)$	$\frac{3}{4\rho_s} + \frac{3\rho_s}{4\rho_s\pi N}$

	S<1	1≦S <scr< th=""><th>S≧Scr</th></scr<>	S≧Scr
雲なし	何も起きない	何も起きない	凝結
雲あり	昇華	凝結	凝結

$r_d[m]$: 雲粒半径
r _{aero} = 1.0×10 ⁻⁷ [m]: 凝結核半径
$N = 5.0 \times 10^8 [kg^{-3}]$: 凝結核数密度
$k = 4.8 \times 10^{-3} [W/K \cdot m]$:大気の熱拡散係数
S:飽和比 Scr:臨界飽和比
p_* :飽和蒸気 $E \rho_s$:雲密度 ρ_l : $CO2$ 水密度
A = 27.4, B = 3103 H : Heaviside function

凝結核

CO2氷

拡散成長の概念図

雲粒

CO2ガス



雲物理過程(2)

■ 雲粒落下項の定式化(Kessler(1969) に基づく)

• 雲粒の重力落下を雲粒の終端速度での移流で表現

$$M_{fall} = \frac{\partial}{\partial z} \left(\rho_s \, V_{term} \right)$$

$$V_{term} = C_{sc} \frac{2r_d^2 g\rho_I}{9\eta}$$

$$C_{sc} = 1 + 1.255 \frac{\lambda}{r_d}$$

$$\lambda = \frac{k_B T}{\sqrt{2\pi\sigma^2 p}}$$

$$\eta = \eta_{ref} \left(\frac{T_{ref} + C_{CO_2}}{T + C_{CO_2}} \right) \left(\frac{T}{T_{ref}} \right)^{3/2}$$

 $r_{d}[m]: 雲粒半径$ $V_{term}[m/s]: 雲粒の終端速度$ $C_{sc}: Cunningham補正係数$ $\lambda[m]: CO_{2}$ の平均自由行程 $k_{B}[J/K]: Boltzmann定数$ $\sigma[m]: CO_{2}$ 分子の有効直径 $C_{co2} = 240[K]: CO_{2}$ に関するSutherland定数 $T_{ref} = 293[K]: 基準温度$ $\eta[Pas]: 粘性係数$ $\eta_{ref} = 1.47 \times 10^{-5}[Pas]: 基準粘性係数$



臨界飽和比の重要性

■ 臨界飽和比 Scr

- 凝結が生じて雲粒が生成されるの に必要な飽和比
- 地球大気では Scr ~ 1.0

Glandorf et al.(2002)

- 凝結核として H2O 氷でコーティン グされたダストを想定
- 室内実験により CO2 氷について Scr ~ 1.35 となることを発見
 - ・極域の温度観測の結果とも整合的 (Hinson and Wilson, 2002)
- 火星大気は過飽和を許容すること を示唆





Figure 3. Selected RS temperature profiles at 67°S for $L_s = 144.6^{\circ}-146.6^{\circ}$. One pair of profiles is shown from each day of the sequence in Figure 2b. Samples in Figure 2b corresponding to these profiles are labeled with a circle. The dotted line in each panel shows the saturation temperature of CO₂.



「算スキームの詳細

- 空間方向の離散化
 - スカラー量に関する格子点を格子の中心に配置
 - ベクトル量に関する格子点をスカラー量格子点から半格子ずらして配置
 - 空間微分は2次 or 4 次精度の中心差分で離散化
- 時間方向の離散化(モード別時間分割法)
 - 音波・凝結に関連する項には短い時間ステップ、 それ以外の項には長い時間ステップを使用
 - 短い時間ステップの項はHE-VI法で離散化
 - ◆ 水平方向:オイラー法(陽解法)
 - ◆ 鉛直方向:クランク・ニコルソン法(陰解法)
 - 長い時間ステップの項はリープフロッグ法で 離散化





 Δz .

 Λx



http://www.gfd-dennou.org

概念図



■計算領域·計算時間

• 水平 50 km, 鉛直 20 km(格子間隔 200 m)



- 高度1-15 kmで一様冷却,高度0-1 kmで一様加熱
- 加熱と冷却を常時バランス



失敗計算例:Scr = 1.35 の場合



- 三角形の凝結領域 が約 100 m/s で 拡大
- 差分誤差による非
 物理的な解
- 差分誤差の移流に よって周縁で連鎖 的な凝結が発生



凝結過程の改良~閾値の導入の概要~

- 凝結過程において雲密度の閾値 ρ を導入
 - ・ 飽和比が1を超えていたとしても、一定以上の雲密度でなければ凝結しないものとする
 - 雲密度の差分誤差による凝結を防ぐ

変更前

	S<1	1≦S <scr< th=""><th>S≧Scr</th></scr<>	S≧Scr
ρs=0	何も起きない	何も起きない	凝結
ps>0	昇華	凝結	凝結

変更後

	S<1	1 <s<scr< th=""><th>S>Scr</th></s<scr<>	S>Scr
ρs=0	何も起きない	何も起きない	凝結
$0 < \rho s < \rho T$	蒸発	何も起きない	凝結
ρs>ρΤ	昇華	凝結	凝結





改良後の計算結果 : Scr = 1.35 の場合



三角形の凝結領域
 は解消

これでようやく過飽
 和状態を取り扱え
 るようになった!



計算結果:Scr=1.0, 雲粒落下なしの場合

鉛直流速





 対流は雲内部 に侵入しにくい
 熱は効率的に 輸送されない



計算結果:Scr=1.35, 雲粒落下なしの場合

鉛直流速

雲密度



初期に積乱雲 に類似した雲 が生成 ■ Scr=1.0 の場 合ほどではな いが、やはり対 流は雲内部に 侵入しにくい ほぼ準定常状 態となった



計算結果:Scr=1.0, 雲粒落下ありの場合

鉛直流速

雲密度

 対流は雲内部 に侵入しにくい
 熱は効率的に 輸送されない
 落下を無視し も思わせい

作成ミスにより間に合わず... 申し訳ありません!

た場合と比べ 雲の鉛直ス ケールが減少



エクスナー関数



計算結果: Scr=1.35, 雲粒落下ありの場合

鉛直流速

雲密度



 対流は雲内部 に侵入しにくい
 熱は効率的に 輸送されない
 落下を無視し た場合と比べ 雲の鉛直ス ケールが減少

考察:主成分凝結対流の構造

■ 対流は雲内部に侵入しにくい

- 凝結前の気塊は乾燥断熱的に上昇
- 凝結後の気塊は湿潤断熱的に上昇
- 火星の場合、凝結すると浮力が得にくい



臨界飽和比が大きいと潜熱による浮力 が得られる



考察:循環の維持・成長のメカニズム

雲密度



density of cloud

24 28 32 36

> 28 32 36 40

24

44 48

t=180000 :

44 48

t=180000 s

(×1000 m)

(×1000 m)

■ 雲層から雲が下 方へ輸送・蒸発 強い冷却が発 牛 冷気流が地表 面で分流(重力 流) 重力流が衝突, 強い上昇流を形 成



http://www.gfd-dennou.org

温位







- 雲粒落下を考慮 すると雲粒半径 が小さくなる
- 雲粒落下を考慮 すると雲粒半径 は臨界飽和比 に依存しない



まとめ

- 主成分凝結対流の場合、対流は雲内部に侵入しにくい。
- ・臨界飽和比が大きい方が対流は雲内部に侵入しやすい
 雲粒落下を考慮すると雲の鉛直スケールは小さくなる
 対流は雲の蒸発・冷却・重力流によって維持・成長
 以上の結果の一般性を保証するには更なる計算が必要
 - ・より長時間の計算
 - 温度分布(くの字型, 逆くの字型etc), 放射強制, 臨界飽和比 などを変えた計算
 - •より複雑な雲物理過程を導入した計算
 - 3次元での計算etc







火星の mesospheric cloud

Schofield et al.(1997)により初めて示唆

Temperature Profile from Pathfinder Atmospheric Structure Instrument



http://mars.jpl.nasa.gov/MPF/ops/TvsZ_Schofiel d.jpg

Mars Express 搭載の OMEGAの多波長画像(Montmessin et al., 2007)



130°W

5.1 µm

shadov

10:5.

14%5.

.....

134°W

火星のH2O氷雲

実は火星ではH2O氷雲も発生する 火星においてもH2Oは微量成分なので、地球の雲と同様に議論可能





http://www.nasa.gov/mission_pages/ phoenix/images/press/Lidar_Fall_Str eaks_SD_001.html http://www.nasa.gov/images/cont ent/279901main_Temperature_S D_516-387.jpg

http://www.jpl.nasa.gov/missions/ mer/images.cfm?id=2110



火星極冠の典型的温度分布

■ Colaprete and Toon(2002) より引用





H20とCO2の相図

http://www.chem.neu.edu/Courses/1131Tom/Lecture25/sld007.htm より引用

Phase diagram for water and carbon dioxide





CO2 飽和蒸気圧

■ Clausius-Clapeyron(実線), Antoine(破線), James の式 (点線)の比較





初期火星の主成分凝結対流

- 約 38 億年前の火星は液体 の水が存在できるほど温暖 だった
- 大気主成分である CO2 の 氷雲による散乱温室効果 (Forget and Pierrehumbert, 1997; 光田, 2007)
 - 初期火星では広範囲で主成分 凝結
- 主成分の凝結を伴う対流も 発生していた可能性



Copyright : NASA





モデル(deepconv/arare4)の概要

■ 支配方程式

http://www.gfd-dennou.org/library/deepconv/

- 2次元準圧縮方程式(Klemp and Wilhelmson, 1978)に主成分凝結の効果を考慮
 - ◆ 質量減少による圧力低下 · 熱膨張(Odaka et al., 2005)

■ CO2氷雲の物理過程

- 雲粒は拡散過程により成長
- ・凝結の評価

	S<1	1≦S <scr< th=""><th>S≧Scr</th></scr<>	S≧Scr
雲なし	何も起きない	何も起きない	凝結
雲あり	昇華	凝結	凝結

• 以下の4通りについて考える

雲粒の重力落下	なし	なし	あり	あり
臨界飽和比 Scr	1.00	1.35	1.00	1.35





準圧縮方程式についての補足

■ 弾性系モデル

- 連続の式で密度の時間変化項を考慮するモデル
- 連続の式を線形化
- 時間積分にモード別時間分割法を使用できる
 - 計算量を少なくすることが可能
 - •計算不安定を防ぐため音波は短い時間ステップで計算
 - 凝結のタイムスケールは 10 [s] オーダーなので, 短い時間 ステップで計算
 - それ以外は長い時間ステップで計算



計算結果:雲密度の水平平均の時間変化





S100F1



S135F1





計算結果:全運動エネルギーの時間変化



S100F1







S100F0, S135F0 で は全運動エネルギー が急増する時間帯 が存在 S100F1, S135F1 で は全運動エネルギー がほぼ定常的に増 大 運動エネルギー急増 の時間帯と雲底高度 の低下開始時刻は ほぼ一致



計算結果:S135F0の運動エネルギー急増





http://www.gfd-dennou.org

温位

計算結果:S135F0の雲底高度低下

運動エネルギー急増前後での温位変化率(熱収支)

- 運動エネルギー急増後, 雲底付近での上昇流による凝結加熱・下降流による蒸発冷却が増大
- エネルギー急増前, 雲の下方での温位変化率は正(乾燥領域の拡大・雲底高度の上昇)
- エネルギー急増後, 雲の下方での温位変化率が負(雲領域の 拡大・雲底高度の低下)

火星大気を特徴づける数値

重力加速度: $g = 3.72[m/s^2]$ 定圧比熱:c_n≈734.1[JK⁻¹kg⁻¹] 気体定数: R≈188.9[JK⁻¹kg⁻¹] CO,の潜熱:L≈5.86×10⁵[Jkg⁻¹] 地表面圧力: p, ≈ 7.0×10²[Pa] 極冠周縁の最下層温度:T_c≈165[K] 音速:c,≈195.4[m/s](150Kの場合) 火星平衡温度:T_{eq}≈216[K] 火星の乾燥断熱減率: $\Gamma_{a} \approx 5.06[K/km]$ 火星の湿潤断熱減率: $\Gamma_w \approx 0.95[K / km](150Kの場合)$

本場のプロファイル

■ 基本場の温度・温位・圧力・エクスナー関数

雲粒の重力落下に関する議論

Cuningham 補正を加えた Stokes の法則

$$U_{fall} = \left(1 + 1.255 \frac{\lambda}{r_d}\right) \frac{2r_d^2 g\rho_I}{9\eta}$$

- 北守(2006)の見積もりでは雲粒半 径のオーダーは 10 µm
- 10 µm オーダーの雲粒の場合

 $U_{fall} \sim 10^{-2} - 10^0 [m/s]$

であり, 100 µm に近づくと落下速 度を無視することは不可能 r_{d} :雲粒半径 g:重力加速度 $<math>\eta$:粘性係数 λ :平均自由行程 ρ_{I} :CO2氷密度

度プロファイル(1) 200

Hinson and Wilson(2002)

Figure 3. Selected RS temperature profiles at 67° S for $L_s = 144.6^{\circ} - 146.6^{\circ}$. One pair of profiles is shown from each day of the sequence in Figure 2b. Samples in Figure 2b corresponding to these profiles are labeled with a circle. The dotted line in each panel shows the saturation temperature of CO₂.

温度プロファイル(2)

Colaprete and Toon (2002)

Figure 7. The three temperature profiles used in simulations presented in Figure 8. Temperature profile T1 follows the CO₂ saturation temperature. Temperature profile T2 is consistent with radio occultations and GCM simulations. Temperature profile T3 is representative of a profile just off the polar cap.

温度プロファイル(3)

Colaprete et al.(2003)

Figure 6. Radio occultation temperature profiles (solid and dotted lines) from the north and south polar regions. The dashed line indicates the CO_2 saturation temperature. The CAPE calculated for each profile is indicated. Under these stable conditions there is little to no CAPE.

Figure 7. Radio occultation temperature profiles (solid and dotted lines) from the north and south polar regions. The dashed line indicates the CO_2 saturation temperature. The CAPE calculated for each profile is indicated. Under these supersaturated conditions there is a significant amount of CAPE.

温度プロファイル(4)

Neumann et al.(2003)

Figure 14. Winter temperature-elevation profiles from MGS Radio Science data: (a) South polar night; (b) south polar dawn; (c) north polar night; (d) north polar night. Error bars give $1-\sigma$ uncertainty in temperature. Dashes show CO₂ saturation temperature at ambient pressure from *James et al.* [1992].

温度プロファイル(5)

McCleese et al.(2008)

温度プロファイル(6)

温度プロファイル(7)

http://nova.stanford.edu/projects/mgs/late.html 上以引用

温度プロファイル(8)

http://nova.stanford.edu/projects/mgs/late.html 上以引用

温度プロファイル(9)

MGS のCO2氷雲エコー(1)

Pettengill and Ford(2000)

Figure 2. Examples of periodic cloud echo profiles from orbital passes 207 (L_S =301.3°) and 260 (L_S =316.4°). The discontinuous solid line seen below the clouds corresponds to echoes from the surface, which are often preempted by echoes from the clouds above.

Figure 4. Echo profiles for isolated clouds observed over surface discontinuities on orbital passes 225 ($L_S=306.5^\circ$) and 390 ($L_S=350.7^\circ$).

http://www.gfd-dennou.org

MGSのCO2氷雲エコー(2)

Ivanov and Muhleman(2001)

FIG. 5. Samples of cloud formations for the north polar region. Horizontal scale is equal to 750 km. Vertical exaggeration is about 1:25. These four graphs illustrate the most extensive cloud formations encountered during the first and second north polar winter. Channel 1 returns are marked with black crosses; channel 4 returns are marked with blue diamonds. Those are typical channel-4-type clouds, because most of the signal is detected in this channel. These clouds consist of http://www.gfd-dennou._sloping (ranging from almost flat to 20-25°) linear features.

MGS のCO2氷雲エコー(3)

Ivanov and Muhleman(2001)

FIG. 7. Samples of cloud formations for the south polar region. Horizontal scale is equal to 2050 km. Vertical exaggeration is about 1:50. These four graphs illustrate the most extensive cloud formations encountered during the first south winter. Channel 1 returns are marked with black crosses; channel 4 returns are marked with blue diamonds. Clusters of channel 1 clouds in the latitude band from 80°S to 70°S are evident in orbits 1640, 1654, 10075. Clouds located over the pole are similar to the North polar cloud formations in Fig. 5. In orbit 1640, a channel 4 cloud formation is observed inside a channel 1 formation.

MGS のCO2氷雲エコー(4)

Neumann et al.(2003)

Figure 9. Circumpolar belt of channel 1 clouds observed on 11 March 1999. In this profile segment nearly 1/3 of MOLA shots trigger on clouds. Two unusually strong channel 1 returns occur at 160–200 m above ground.

Figure 10. Circumpolar clouds seen on 8 January 2001 during Year 2. Laser output is lower and channel 1 threshold is too high to trigger on clouds, but channel 2 clouds are seen.

MGS のCO2氷雲エコー(5)

Neumann et al.(2003)

Figure 12. (a) Late spring fog in northern polar twilight. (b) Late summer fog in southern polar night. Both occur shortly after midnight local time.

Figure 15. Multiple cloud decks over the south pole. The vertical exaggeration is 10:1.

